

# 身体とメタファー

## — 解釈学的論理学 (hermeneutische Logik) と 認知意味論 (cognitive semantics) —

瀬戸口 昌也

はじめに

デイルタイは、教育学についての論文<sup>1)</sup>で、子どもの陶冶過程の規則は、心理学的記述分析から導出されると述べている。このような見解に対してすでにわれわれは、解釈学の立場から、子どもの陶冶過程は、子ども自身の体験の表現として、物語という形で形態化され、理解の対象とされていくべきことを主張した<sup>2)</sup>。このような自己の生の物語化に際して重要なのは、物語を語るためのレトリックの技術である。なぜならレトリックは、生を説得的・論証的に語ることから、生の不可解さを印象深く喚起させることまで、生の幅広い表現と理解を可能にするからである。

したがって、子どもの陶冶過程では、子どもが自己の生の表現と理解において、いかにしてレトリックの技術を習得し、適用していくかが問題となる。教師や保護者は、子どもに対して、このようなレトリックの技術を伝えていかなければならない。より一般的に言えば、子ども自身が独自で自己の物語を創造し、展開していけるだけの技術と想像力を持てるようにすることが、教育の課題となってくるのである。

この課題を考えるためには、かつての歴史的な修辞学がそうしたように、レトリックの技術を単に分類したり、体系化するだけでは不十分である。なぜなら、レイコフやジョンソン、あるいは最近のレトリック研究が明らかにしているように<sup>3)</sup>、レトリックは人間の認識に深くかかわっており、まずレトリックが認識に果たす作用が問われなければならないからである。人間の認識過程において、体験された内容がどのような過程を経て、説得的で論証的な表現に至るのか、またそれとは対照的な詩的表現に至るのか、このような問題は、デイルタイの精神科学の基礎づけにおいて、初めて問題とされた事柄であった。デイルタイ自身は、この問題を「分析的論理学」や「詩学」の問題として取り上げたが、後にこの問題は、デイルタイの直弟子であるゲオルグ・ミッシュや、デイルタイの生の哲学の影響を受けたハンス・リップスらによって、論理学の解釈学的研究（「解釈学的論理学 (hermeneutische Logik)」）という形で継承されていったのである<sup>4)</sup>。

そこで本研究は、レトリックの認識論的考察のために、特にミッシュの解釈学的論理学を手がかりにして、人間の認識過程と「表現 (Ausdruck)」行為の関係についてまず明らかにしてみたい。次にそこで明らかになった問題点を、最近の言語学の新しい動向である「認知意味論 (cognitive semantics)」の観点から考察してみたい。このような作業によって、解釈学的論理学と認知意味論との共通点と相違点が明らかになり、子どもが自己の物語を豊かに表現するために必要なレトリックとはどのようなものなのか、その手がかりを得ることができよう。

## 1. ミッシェの解釈学的論理学

ミッシェは生の哲学の立場から、人間の認識の対象となる世界を、生が何らかの形で「表現」された世界（「表現世界」）として捉えている。「表現とは至るところで、そこにおいて生が身体的に表現され、ある共同体の人間に結びついているような形式である。認識が一般に、生によって表現されたものへと、つまり体験可能で理解できる内実へと理解していくように方向づけられているとしたら、表現はどこでも、われわれにとって最初のものである」<sup>5)</sup>。すなわちミッシェにとって生の表現とは、人間にとって原初的な身体的表現である「身振り」から、高度な精神的表現である言語や芸術、宗教までさまざまな形で現れるものであり、これらは全て体験可能であり、理解可能なものであるとされる。われわれはここで、ミッシェが表現世界の認識過程を分析する出発点として、人間の原初的な表現形式である「身振り」から出発していることに注目しなければならない。なぜならレッシングも指摘しているように<sup>6)</sup>、ミッシェは表現行為の「身体性（Leiblichkeit）」を特に重視しているからである。

ミッシェによれば、身体はわれわれにとって物的に知覚され、それゆえまず「われわれ自身を外的に境界づけるもの（äußere Umgrenzung）」と見なされている。しかしこのような身体観はわれわれが身体を物的なものとしてではなく、ひとつの運動として捉えようとした場合、単純な捉え方であることに気づく。「なぜなら身体は、われわれを単に外へと切り離す（abschließen）だけではなく、同時にわれわれを、外界または環境（Umwelt）へと開く（aufschließen）ものであるからである。このことが言えるのは、後で触れるように、身体的運動は、ただ環境への方向づけの中でのみ行われるからであり、あるいは環境の中へと介入していくことが、まさに身体的運動となるからである」（147）。このようにミッシェは、身体をそれを取り囲む環境との動的な関係で捉えようとする<sup>7)</sup>。

ミッシェにとって身体とは、その運動を通してわれわれ自身と環境とを媒介しているものとして捉えられていると言えよう。われわれはもともと身体を通して、外界や環境と一体化した生活をしている。このような生活は、生物一般に共通した素朴で自然的な態度であり、ミッシェはこれを「生活行動（Lebensverhalten）」と呼んでいる。この状態では、行動している者にとっては、「心的で内的なもの（seelisches Inneres）」と「身体的で外的なもの（leibhaftes Äußeres）」という区別は存在しない。なぜならこのような区別は、われわれ人間が素朴な生活行動の中で、後から「反省（Reflexion）」を行った結果、初めて生じるものだからである。「身体的で外的なもの、心的で内的なものとの対立全体は、原初的な生活行動の段階よりずっと後での、反省的段階において初めて生じるのである。この後続的な反省的段階において、心は身体に対置され、内性（Innerlichkeit）によって、心的生（seelisches Leben）という狭い呼び方をされるものになるが、このことは、われわれがまず問題としなければならないことと明確に区別しなければならない」<sup>8)</sup>。

ミッシェがここで「反省的段階」と呼んでいるものは、人間が素朴な生活行動の中で、これまで疑問視することのなかった環境との関係に初めて気づくことであり、このような「まなざしの転回」によって、われわれは初めて、身体を媒介として「外的なもの」と「内的なもの」との区別、さらにそこから「身体」と「心」の区別について理解することができるようになる。したがって、「身体的で外的なもの」と「心的で内的なもの」という区別は、ミッシェの言うように反

省を契機として理解された対象について、後から与えられた「イメージ的言い回し (bildliche Wendung)」にすぎない。「…ここで外と内について語ることは、まなざしの転回に対するイメージ的な言い回しにすぎない。このまなざしの転回は、ラテン語ではレフレキシオ (reflexio) であり、それは本来的に、自己省察 (Selbstbesinnung) や自己自身を見いだすこと (Sich-selbst-Finden) を現している。それは外と内という空間的な関係を、空間的把握が全く問題とならないような関係、つまり身体に対する私 (Ich) の関係か、あるいは身体に対する心との関係へと転用するのである。[中略] したがってわれわれはまず、心は一般に身体の内限定されるものではないという考えを推し進めなければならず、また、身体の中に限定された心的で内的な生が、身体的運動において外側へと現れ出て、それが生の表出として理解されるという考えも避けなければならない。ここではわれわれは、基本的理解の中で、すなわち心理学的反省の意味で、内と外が区別される以前の層を動いているのである」<sup>9)</sup>。

ミッシュのこのような見解は、デイルタイの「構造心理学」の対象となっている「心的生」の概念の批判的考察であることが分かる。デイルタイは後期に、「心的なもの」と「物的なもの」との区別について解釈学的見解を述べてはいるが<sup>10)</sup>、しかしこの見解が、心的生の心理学的考察に取って代わることはなかった。ミッシュはデイルタイが心理学の出発点として前提した心的生を、「イメージ的言い回し」として捉え、その概念自体を解釈の対象とする。その際彼が遡るのは、外と内あるいは身体と心とが区別される以前の段階である生活行動であり、そこでは自己と環境は、身体を媒介として一体となっているのである。

ところで、この区分の契機となる「まなざしの転回」はどのようにして生じるのであろうか。ミッシュによれば、それは対象の把握を通してであり、より詳しく言えば、対象の言語による表現と、その「意味 (Bedeutung)」理解を通してである。自己の生活環境を対象として把握することは、自己と世界、主観と客観との関係を理解する契機となる。人間はこの対象把握を、言語によって「名づけること (Benennung)」によって行うが、ミッシュによればこの行為は、指示対象があらかじめ独自に存在し、それに対して後から適切な言語表現と意味を付与するというような行為ではない。このような見解は、言語の機能を、指示対象に対する「記号 (Zeichen)」や「レットテル」として見なすものであるが、しかし言語で指示された対象に対して、われわれはその意味を本来緊密に確定できるものではないと、ミッシュは言う<sup>11)</sup>。

ミッシュはこのことを示すために、指示対象に対する意味が一般に自明なものと思われる固有名詞 (人名) を例に挙げている。人名はある特定の人物を示すものであるが、それが含む意味内容は多様である。われわれはその人名に対して、その人物の性格や職業、経歴、業績などをあらかじめ理解している。これらの特徴は人名によって統一され、いわば「カプセル化」されているのであり、このことがわれわれに特定の人物を名指すことを可能にしているのである。「このように、それが誰であることを示す固有名詞は、それが個人をその全体性と結合性の中で特徴づける限りは、ある確かな一般の意味をすでに持っている。しかしこの一般性は、個人を特徴づける個々のさまざまな形態が、ある概念の下に秩序づけられるであろうような一般性ではない。意味を際立たせて確定することは、ある特徴 (Merkmal) の助けによって起こるのではなく、ある典型的なもの (Typisches)、すなわち具体的で一般的なものという性格を持つのである」<sup>12)</sup>。

ミッシュがここで述べている、固有名詞の意味の「一般性」は、形式論理学で言う概念の定義

(対象の特徴に基づく、類と種の包含関係)とは明らかに異なっている。われわれは固有名詞の指示対象について、すでにあらかじめ具体的で典型的な理解を持っているのであり、この理解に基づいて、語の意味の確定を行うのである。それゆえ対象を言語によって名指すことは、その言語ですでに先取りされている意味内容を解釈し、確定していくことに他ならない。このようにミッシュにとって、固有名詞は解釈学的性格を持つのであり、解釈の対象となる先行的な意味内容を、ミッシュはハンス・リップスの言葉を借りて、言語の持つ「想念 (Konzeption)」と呼んでいる。「このように指示すること (Bezeichnung) は、あらゆる言語表現と同様に、意義 (Sinn) と意味に媒介されているのであり、直接に直感的な把握ではなく、先行的に規定されたある意義において行われる精神的取得 (Nehmen) である」<sup>13)</sup>。ミッシュにとって、言語の想念の解釈は、単に個人的解釈にとどまるものではなく、われわれが言語の一般的意味を確定するための共通土台となるものであり、この土台からどのようにして言語の意味が一般的意味として確定され、指示対象を対象化してくるのかが、分析されなければならないのである。

## II. 「鳴ること (Tönen)」の対象化

ミッシュはこのことを、当時の言語学や言語哲学の成果を取り入れながら、「鳴ること」の対象化を例にとって説明している。「まず明らかなのは、最も初期の言語の刻印づけにおいては、聞くこと (Hören) は鳴ることと、また、見ること (Sehen) は見えていること (Leuchten) とまだ一体であったということである。詳しく言えば、対象的なものがまさに優勢であり、鳴ることと見えていることが、語の刻印づけを規定する。感じ取る側の主観的側面、すなわち聞くことと見ることは、まったく完全に影を潜め、その結果見ることは見えることの中に、聞くことは鳴ることの中に消え去っている。そして [言語学者の] ハーゼが一般に確かめたように、根源的な意味はすべて感覚的なものであるということが明らかになる。つまり、さまざまなインドゲルマン語から集められたさまざまな語根 (Wurzel) が、鳴ることに対して、すべて直感的な関係を刻印づけるのである」<sup>14)</sup>。つまりミッシュによれば、「鳴ること」の対象化の過程において、その出発点では、鳴っている対象 (客観) とそれを感じる側 (主観) は、まだ一体となっており、鳴っている対象の方から、それを感じ取る方へと働きかけてくるのである。われわれはそのような「動き (Bewegung)」を感覚的に感じ取り、そのような動きを名づけようとする。この場合、この動きの様態やそれが生じてくる場所や方向の違いによって、われわれはこの動きを名づけるのにふさわしい意味の分節化を行うのであり、こうして「鳴ること」を表現する多様な言語表現が確定されていくのである。「…すべての知覚は、言語表現の中で諸々の運動として把握され、カッシーラが正しくも示したように、言語によるいわゆる概念形成の中で、動的なものを把握する現象として把握される。この運動の多様な把握の中で、しかし再び意味の分節化が生じる。すなわち一方では運動の様態の観点から、[音が] わき出る (quellen)、流れ出る (fließen)、わななく (zitterend) ような動きにある、うずまくような (wirbelnd) 動きにある、などの分節化が与えられるのであり、他方では運動の場所と方向の観点から、[音が] 張りつめる (spannen)、ゆるむ (loslassen) などの分節化が与えられるのである」<sup>15)</sup>。このように、音が「わき出る」、「流れ出る」、「張りつめる」などの表現は、すべてわれわれが聞き取ったある「運動」に対して与えられる言語表現であるが、これらの表現の根底には語源的に、「鳴ること」に対して共通しているさまざまな

「語根」が使用されていると、ミッシュは言う。「しかしながら決定的なことは、これまで述べてきたように、これら分岐した差異化のすべてが、感覚的で直感的なものの中にあるように見えるにもかかわらず、それぞれの語根において、あの共通したもの（*Gemeinsames*）が刻印されているということである。より厳密に言えば、それは全く同一のものとしてではなく、すなわち固定して概念的に確定した意味の統一体が存続しているのではなく、動的な多様性が存続しているのである」<sup>16)</sup>。

ミッシュのこのような見解は、「鳴ること（*Tönen*）」という普通名詞が、一種の言語的想念であることを示している。それは対象となっている運動の様態や場所、方向においてさまざまな言語表現と意味に分節化されていく。しかしこれらの表現は異なっても、これらがすべて共通して「鳴ること」の意味を含み、そこから派生してきたものであることは、語源的に明らかであるとされる。言い換えれば、「鳴ること」の意味は確定したものではなく、その対象化に際して多様に分節化していくのであるが、それにもかかわらずわれわれはその根底に、共通なものを理解しているのである。そしてこの対象化の出発点においては、ミッシュの言うように、主観と客観、直感的感覚と意味、あるいは感覚的なものと精神的なものとの区別はなく、両者は一体となっている。つまり対象化のための言語的表現と意味理解は、もともと直感的で感覚的なものであり、このことは、対象化（言語的表現と意味理解）が身体を基盤としていることに基づいていると言えよう。

ところで、ミッシュの言語による対象化の過程は、ドイツ語およびそれが属するインドゲルマン語を中心に考察されているが、日本語ではどうであろうか。例えば「ほのめく」「ほのぼの」「ほのぐらし」などの語には「ほの」という語が共通しており、「ほの」はこれらの語の語根であると言える。「ほの」にはもともと「かすか、うすうす、ちょっと」などの意味があり<sup>17)</sup>、これが接頭語となって多様な表現と意味を作り出していることが分かる。しかしここでは、いずれも「かすか」な対象、すなわち「物の形・音などがわずかに認められる」状態や運動が示されていることは共通している。このように「ほの」は、多様に分節化しながらも、共通して感じ取られるものを再現しているわけである。

さらに語根のはっきりしない、語源のわかりにくい日本語の場合も同様の特徴が見いだせる。この場合共通の意味を再現するのは、語根ではなく、さまざまな語に共通した音(発音)である。例えば豊永武盛は、精神医学の立場から、言葉と身体との関係の考察を行っているが<sup>18)</sup>、語源のわかりにくい日本語の二音節動詞を、語尾の発音別に分類してみると、分類された動詞間にある共通した意味が認められることを報告している。例えば幼児がまず発音できるようになる「口唇音」(p・b・m)を語尾に持つ動詞について、p語尾で終わる動詞には、共通して「交流、交叉する」という意味が再現されている(例えば「会ふ」「言ふ」「交ふ」「食ふ」「問ふ」など)。また、b語尾で終わる動詞には、「飛び散る」という意味が再現されていると言う(例えば「飛ぶ」「呼ぶ」「焼ぶ」「統ぶ」「延ぶ」など)。さらにm語尾で終わる動詞には、「集中する、一杯になる」という意味が再現されている(例えば「産む」「倦む」「汲む」「住む」「積む」など)。このように、p語尾動詞群とb語尾動詞群とm語尾動詞群として分類される動詞には、それぞれの群に共通した意味が認められるのであり、さらにこれらの動詞群で再現された意味には、明確な対応関係(交流・飛散・集中)が認められると言う。

このような言語学的研究は、(ミッシュの時代のものも含めて) その成果や内容について、言語学や哲学の領域において、これからさらに詳細に検討される必要があるだろう。しかしここで重要なことは、以下の点である。ひとつは、論理的思考の出発点である対象化の過程において、言語的表現と意味の関係は決して確定したものではなく、むしろミッシュの言うように、「動的な多様性」を持つ関係として捉えられるということである。対象化に用いられる言語的表現は、その意味が解釈されるべき想念として捉えられなければならない。もうひとつは、この言語的表現の発生過程と分節化過程において、対象を示すために用いられる語の選択は、決して恣意的に行われるのではなく、対象化される運動に対して、語根という形で、さらには発音という最も原初的な形態化をとって、ある共通の意味が志向され、そこから運動の様態や場所や方向によって意味的分節化が生じてくるということである。そしてこのことは、身体を基盤として、身体的感覚を伴って行われるのである。

### III. 論証的思考の二つの極

これまでにおいて、ミッシュの言う対象化は、身体的感覚に基づいて対象を表現するために、一定の共通した意味に方向づけられるとともに、対象との動的な関係に応じて個別的分節化を行うものであることが明らかになった。それでは、このような特徴を持つ対象化から、どのようにして論証的思考が成立してくるのだろうか。

ミッシュは論証的思考は、その対象に応じて両極的で対照的な特徴を持つという。そのひとつは自然科学において代表的に見られる対象化であり、これをミッシュは「純粹に論証的な形式化 (rein diskursive Formulierung)」と呼んでいる。「ここでは [主観と客観の] 分裂は、次のような対立的方向を持つに至る。すなわち、意味された対象や対象の関係や事態などが残って、認識主体から遠ざかるだけでなく、意味されたことが言明の中で完全に引き上げられ、取り出され得るような仕方で、認識主体から切り離されるのである。そこで生じるのは、生とは関係のない自然科学の客観性であり、その理想は、人間の生き生きしたものの残りすべてを、いやそれどころか、人間一般への対象関係という関係を除外することである。数学的な記号言語が決して十分なものでない場合、そこでは、概念の定義と死んだ言葉を用いた名づけが対応する。その結果が、精密科学の普遍妥当性なのである」<sup>19)</sup>。

このようにミッシュは、純粹に論証的な形式化では、対象それ自体はそれを認識する主体とは、「切り離された」存在であると言う。そこでは数学や自然科学の術語や概念のように、すべての認識主体において、その言語的表現とその意味内容は完全に一致するような関係にある。このように、認識主体に左右されずに、どの主体に対しても同じ意味を有する対象を、ミッシュは「自己を欠いた対象 (selbstloser Gegenstand)」と呼んでいる。このような対象を確定するためには、対象を具体的な生活環境から切り離し、一般的な抽象化を行っていく作業を必要とする。ミッシュ自身が挙げている例を取れば、「熱」「光」「音」「電気」などの言葉は、すでにそれが示す対象とそれを認識する主体との間で、抽象的な関係を含んでいる<sup>20)</sup>。なぜなら、現実の生活において、われわれは熱や光や音などを個別に認識しているわけではない。これらはある特定の環境の生活行動の中で起こる現象全体から、五官を通して個別に抽象化されてきた概念である。このような抽象化が目指す方向は、「出来事の合法則性」であり、こうして導き出された法則性は、自然科

学の理論や体系を形成する。

このような純粹に論証的な形式化に対して、論証的思考において特徴的なもうひとつの対象化は、精神科学に代表されるような対象化である。この場合、対象は純粹に論証的な形式化と違って、それ自体で固有の意味を有するものとされ、それにふさわしい言語表現を認識主体に要求するものとされる。「それに対して、それ自身の自己を持っているような客観態 (Objektivierung) が言語化されるべきところ、その知識がそれ自ら言い表されるべきところでは、つまり生がそれ自身で意味していることにおいて把握されるべきところでは、私と対象との両極間での対立的で循環的な運動が問題となり、対象と自己自身の間での揺れ動きや、客観化しようとする精神の振動 (Zittern) が問題となるのである。それには、概念の生き生きとした在り方が対応する。この概念は、精神科学の中で、語で言及しようとする振動する対象に固有の表現的性格に基づいて生じるのであり、また、言語の自由な行為の中で、対象自身の生に託される形で生じるものである。そこでは概念形成は、的確な語の発見と結びついており、語に持たせられるべき実在との結びつきから生じるものである。そしてこのことはソクラテスが、把握することへと導く彼の術を助産術と名づけたように、いわばひとつの出産なのである。そしてこの結びつきにおいて、真理それ自体がその場所を得る。そこでは真理は表現の純粹性と一体となっている。純粹に論証的形式化において、真理が判断とその事物的な正しさへと制限されているのとは違って、それは生の真理 (Lebenswahrheit) である」<sup>21)</sup>。

このような対象化の過程によって確定した語を、ミッシュは「喚起的言葉 (evozierende Sprache)」、あるいは「解釈学的対象 (hermeneutischer Gegenstand)」、「解釈学的概念 (hermeneutischer Begriff)」などと呼んでいる。このような概念は、特に詩的表現に多く見られるが、それだけでなく、精神科学特有の概念でもある。ここでは認識主体と対象との関係は、純粹に論証的な形式化とは違って、両者は切り離されたものではなく、密接な「循環関係」にある。すなわち主体は、対象からそれにふさわしい表現を探そう繰り返す求められるのであり、そしてそれにふさわしい的確な表現が見つかった時、「生の真理」が獲得されるとしている。

これまでの考察において、ミッシュにとって論証的思考の成立過程は、身体的な生活行動を基盤にし、言語的想念に導かれながら、言語的表現と意味内容の一致を求めていく作業であることが明らかになった。そしてこのような作業の結果、論証的思考は純粹に論証的な形式化と、喚起的言葉という形式へ両極化していくことも分かった。ミッシュによれば、論証的思考においてこのような両極化が生じるのは、その対象がそれ自体で固有の意味を持つか、あるいは一般的意味を持つかに由来している。対象それ自体が意味を持って認識主体と出会う場合には、喚起的言葉が形成され、対象が認識主体によって抽象化を経て一般的意味を持った場合には、純粹に論証的な形式化が成立するのである。それぞれの思考形式は、精神科学と自然科学を特徴づけるものであり、それぞれにおいて真理概念も異なってくると考えられる。

それではこのように両極化した思考形式は、どのような関係にあるのだろうか。論証性を二つに区分することなく両極的に捉えた場合、一方から他方への移行段階が当然存在することが考えられる。そうだとすれば、論証的思考において、喚起的言葉から純粹に論証的な形式化へ、あるいは逆に純粹に論証的な形式化から喚起的言葉への移行は可能なのだろうか。ミッシュは確かに、喚起的言葉が「生と論理の間の亀裂」を克服するものであることや、実存的意味と論理的意

味とが「解釈学的に媒介」されると述べている<sup>22)</sup>。このことは、両極的な思考形式が、静的な対立関係に置かれるのではなく、動的に媒介される関係にあることを示唆するものである。しかし、実際それがどのように遂行されるのかについては、ミッシュ自身詳しい考察を行っていない。ミッシュの論証性の考察は、精神科学と自然科学の対象性の記述分析に留まり、身体を基盤とする生活行動から、両者がいかにして発生し、分岐してくるのかについての考察が欠けているのである。

#### IV. レイコフとジョンソンによるメタファー理論

この問題を考える上での手がかりとなるものが、アメリカのジョージ・レイコフやマーク・ジョンソンらによって展開されている「認知意味論」、もしくは「理解の意味論 (semantics of understanding)」である。この意味論の特徴は、人間の認識の基盤に身体を置き、人間の知識の成立過程を、身体を基盤とするメタファー的思考の結果として捉える点にある。

レイコフとジョンソンによれば、従来の認識論は、西洋文化に伝統的に見られる二つのものの見方(彼らは「神話 (Myth)」という呼び方をしている)のどちらかに属している。ひとつは「客観主義 (Objektivism)」であり、他のひとつは「主観主義 (Subjectivism)」もしくは「相対主義 (Relativism)」である。彼らの言う「客観主義」とは、世界は客観的な事物から成り立っており、これらの事物は、それにかかわる人間とは独立した特徴を持っているとする見方である。それゆえ人間はこれらの事物を把握するために、その特徴や事物間の関係を正しく把握できる概念やカテゴリーを形成し、これらを事物に即して正しく対応させていかなければならない。このような作業によって、人間は現実を合理的に把握でき、普遍妥当な真理を得ることができるとされる。このような見方は、哲学史では17世紀の合理主義以来、現在まで広く普及しているものである。それに対して「主観主義」は、世界認識において人間個人の感覚や直感を重視し、自己の感情や審美的感受性を重んじる。世界の記述は、感情や感受性を現すにふさわしいメタファー的な表現が使用され、世界の事物は個人のイメージの産物となる。それゆえ主観主義で言う「真理」は絶対的なものでなく、相対的なものとなる。このような見方は、歴史的にはロマン主義に代表されるものであると言う。

さらにレイコフとジョンソンによれば、客観主義と主観主義では、「理解」について異なった関心の方向性が見られる。すなわち客観主義では、理解は主体が外界でうまく活動できることに関心が向けられ、主観主義では理解は、その内的な側面(個人的な意味や価値)に関心が向けられる。両者の違いは、理解が外的な方向に向かうか(世界理解)、内的な方向に向かうか(自己理解)であるが、両者に共通しているのは、理解が世界と自己、あるいは環境と人間との明確な区分を前提に成立すると捉えている点である。しかしレイコフとジョンソンによれば、環境と人間は本来切り離されて考えられるような関係ではなく、人間は環境の一部だから、環境と常に相互作用している存在として捉えられなければならない。それゆえ理解も、この相互作用から生じてくる。このような立場を彼らは「経験主義 (experientialism)」と呼び、次のように説明している。

「経験主義者の神話では、理解が生じるのは、相互行為 (interaction) から、すなわち環境と他の人との絶え間ない交渉 (negotiation) からである。それは次のようにして生じる。すなわち、



われわれの身体の性質や物理的文化的環境の性質が、これまで議論してきたような自然的な次元の観点から、われわれの経験にある構造を与える。経験が繰り返されることによってカテゴリーが形成されるに至るが、これらのカテゴリーはそれらの自然的次元を持った経験的形態 (experimental gestalt) である。このような形態は、われわれの経験に一貫性を与えるのである。環境の中や環境との相互行為から直接に生じた形態に基づいて、経験が一貫性を持って構造化されている場合、われわれは自らの経験を直接に理解する。別の領域の経験を構造化するために、経験のひとつの領域から形態を使用する場合、われわれは経験をメタファーとして理解するのである<sup>23)</sup>。

要するに、レイコフとジョンソンが言う「経験主義」とは、人間の認識や知識の起源を経験に求める点では、歴史的な「経験論 (empiricism)」と同じであるが、知識の成立過程については次の点で全く異なった立場をとる。すなわち、環境との身体的な相互行為が繰り返されることによって形成されたカテゴリー (「経験的形態」) によって経験が構造化されること、さらにこうして構造化された経験とカテゴリーが新しい経験へと適用されることによって、新たな経験がメタファーとして理解されると言う点である。このような立場から見れば、客観主義が求める普遍妥当的知識も、主観主義が用いるメタファー的表現も、身体的経験を基にしたメタファー的思考の関心が、世界理解か自己理解かという両極端の方向へと向いた結果となる。この意味で経験主義は、客観主義と主観主義のいわば「中間領域 (middle ground)」に位置づけられるのである。以下において、このことを例を挙げて具体的に考察してみよう。

## V. 「理論 (theory)」のメタファー的理解

われわれは、「理論」という語の意味をどのように理解しているだろうか。例えば「理論」は、辞書的な意味では「個々の事実や認識を統一的に説明することのできる普遍性を持つ体系的知識<sup>24)</sup>」となる。しかしわれわれは、このような意味を意識して日常的に「理論」という語を使用しているわけではない。レイコフとジョンソンは、この語が日常生活の中でどのように使用されるのか、次のような具体例を挙げている<sup>25)</sup>。

「それが君の理論の土台なのか (Is that the foundation for your theory?)」

「ここまでは、理論の骨組みを組み立てたにすぎない (So far we have put together only the framework of the theory.)」

「その理論にはもっと支えが必要だ (The theory needs more support.)」

「そのような仮定では、強力な理論を構築することは決してできないだろう。(You will never construct a strong theory on those assumptions.)」

「彼らは彼の最新の理論を論破した (They exploded his latest theory.)」

これらの表現は、(英語でも日本語でも) 日常よく用いられる表現である。レイコフとジョンソンによれば、これらの表現の根底には「理論」についての一定の共通理解があるという。それは「理論は建築物である (Theories are buildings.)」というメタファーである。上記の「理論」についてのさまざまな表現は、このメタファーにすべて関連しており、「理解のひとつの基本的なメタファー的体系」を形成している。そしてわれわれの「理論」についての一般的な理解は、実は厳密な辞書的定義よりも、メタファーによって広く共通理解を得ていると言ってよい。

ここではメタファーは、理解のための重要な手段になっているのである。

それでは「理論は建築物である」というメタファーにおいて、「理論」と「建築物」はどのように結びついているのだろうか。「理論」は基本的命題や原理を基にして、知識を積み上げていく。同様に「建築物」も基礎（土台）を基に、材料や資材を積み上げていく。また、理論の一部をなす命題や知識は、当然ながらそれを含む理論全体と密接に関連している。建築物もその設計は、各部分の構造や間取りを、建物全体との関係において十分に計算しなければならない。さらに理論を構築する際は、根拠となる事実を積み重ね、批判や反論にも強固に持ちこたえられる安定した体系を築かなければならない。建築物も同様に、土台や各部分に加わる物理的力は構造上安定し、バランスがとれていなければならないのである。理論と建築物の間に見られるこのような共通点、すなわち「下から上への移動」、「部分と全体との関係」、「体系的バランス」は、われわれが両者を認識する際に常に経験している一定のイメージであると言える。そしてこれらの経験はすべて、身体を媒介とする環境との相互作用の中で繰り返されるものである。「上・下」の方向づけは身体を中心として定められるし、「部分と全体」や「バランス」は、身体が有機的組織体として恒常性を維持したり、身体的運動を行う場合に繰り返し知覚されるイメージである。これら諸々のイメージを、レイコフとジョンソンは前述したように「経験的形態」、あるいは「イメージ図式 (image schema)」と呼んでいる。

「理解でき、推論することのできる有意味に関係づけられた経験をわれわれが得るためには、われわれの行為や知覚や概念にパターンと秩序がなければならない。図式とは、これら継続的に秩序づける活動の中で繰り返されるパターンであり、型 (shape) であり、規則正しさ (regularity) である。これらのパターンがわれわれにとって有意味な構造として現れるのは、主として空間を通しての身体的運動、われわれの対象操作、また知覚的な相互行為のレベルである。重要なことは、イメージ図式の動的な構造を認識することである。私はこれらの図式を、われわれの経験と理解を組織化するための構造と見なす<sup>26)</sup>。

このようにレイコフとジョンソンによれば、イメージ図式はカントの認識論で言うような固定した図式ではなく、「動的」な活動を通して浮かび上がってくる反復される「パターン」である。それゆえ決まった数や種類を、あらかじめ確定できるものではない。ジョンソンは考えられるイメージ図式として、上述したものの他に「容器 (container)」、「道 (path)」、「力 (force)」、「中心と周辺 (center-periphery)」、「連結 (links)」、「分割 (splitting)」などを挙げているが<sup>27)</sup>、これらはすべてわれわれの日常的な世界理解に広く浸透しており、われわれの経験を有意味なものとして構造化し、共通理解を可能にしているものである。逆に言えば、共有されるイメージ図式が変われば意味は変わるし、イメージ図式が複雑に関連しあい、別の経験に適用されることによって、経験が新たな意味を持ってメタファー的に理解されることになる。したがって意味とは、客観主義が言うように、ある対象に対して絶対的に確定できるものではなく、また主観主義が言うように、個人的理解の内に相対的なものとして解消してしまうものでもない。意味はイメージ図式の共有によって、安定を得ることはできるが、この図式が変化すれば、意味もまた変化するのである。「意味が図式的構造を含む限り、意味とは比較的流動的なパターンであり、このパターンはさまざまなコンテキストにおいて変化する。意味は客観主義が示唆するのとは違って、永続的に固定した対象ではなく、われわれの意味のネットワークの中に慣習的に位置づけられることによ

って、比較的一定の安定性を得る。われわれの意味構造の大部分はこうして存在し、大抵の場合、固定したものと見なされ得るのである。このように習慣化された意味は、字義的 (literal) と呼ばれる。しかし忘れてはならないのは、これら字義の意味でさえ、決して全面的にコンテキストから自由ではない。これらは共有された図式や能力、実践、知識という広範な背景に依存しているのである」<sup>28)</sup>。

ここで言う「字義的」な意味の典型を、われわれは辞書の中に見いだすことができるだろう。レイコフとジョンソンにとって言葉 (概念) の定義は、客観主義者のように、概念が示す対象の特徴を一般化することではない。両者の関心となるのは、概念を生み出し、理解可能にしている経験であり、またこの経験を構造化しているイメージ図式である。先ほどの「理論」の例で言えば、その辞書の意味よりも、その理解を可能にしているわれわれの経験 (建築物の認識) とそれを構造化しているイメージ図式 (「上・下」「部分と全体」「バランス」など) に関心を持つのである。辞書の意味とは、実はこのような経験とイメージ図式が広く習慣化したものの上に成立しているものに他ならない。それゆえ辞書の意味よりも、メタファーによる定義の方が、概念の意味をよりよく理解できる場合がある。このような概念として例えば、「恋愛 (love)」、「時間 (time)」、「考え (idea)」、「理解 (understanding)」、「議論 (argument)」、「道徳性 (morality)」などが挙げられるが<sup>29)</sup>、これらの概念はすべて「メタファーによる定義づけ」を必要とするものである。

辞書的な定義の根底に、身体的経験とそれを組織化するイメージ図式があるとすれば、定義に基づいて構築される科学的理論や論理的思考も、やはり共有されるイメージ図式やそのメタファー的適用に依存している。例えば「容器」の図式を取り上げてみよう。われわれは環境の中で呼吸や食事、排泄などを繰り返し経験することにより、自分の体をひとつの容器と見なすことができる。この容器の図式は、容器の中にあるものと外にあるものを境界づける。ここから「内と外」を区別する図式が生じる。この場合、内と外を区別しているものは身体であり、身体を境にして「心的なもの」と「物的なもの」の区別が可能になる。この区別を哲学の領域に適用すれば、「主観と客観」の区別が生じる。また容器の図式を認識論に適用すると、容器は対象を把握するための「カテゴリー」となる。ある対象が容器の内にあるか外にあるか、すなわちカテゴリーの内にあるか外にあるかは、包含関係を生み出す。このようなカテゴリーの包含関係が、論理的思考に適用されることにより、自然科学の定義や体系的理論が可能になるのである。

## VI. 正当化 (justification) と発見 (discovery) のコンテキスト

このように、辞書的定義や科学的理論の形成の根底にはメタファー的思考があり、このメタファー自体は広く習慣的に使用され、理解されるものでなければならない。言い換えれば、ある概念が定まるためには、それについての諸々のメタファー的表現と理解に共通性と一貫性がなければならないのである。科学的思考や理論形成は、このようなメタファーの共通性と一貫性を維持し、組み合わせ、それを拡大していこうとする試みの結果であると言える。レイコフとジョンソンによれば、人間には科学的理論を形成する場合以外にも、このようなメタファーの共通性と一貫性に基づいて思考し、行動しようとする傾向がもともと備わっていると言う。なぜなら習慣化され一貫性を持ったメタファーは、環境との相互行為を円滑にし、出来事を推論し、予測し、それに対して問題なく行動することを可能にするからである。実生活において、人間が自分の思考

活動や行動に拠り所となる基準を求めることは、自然なことであろう。

しかし人間が生活の中で、習慣化され、共通性と一貫性を持つメタファーばかりを使用することについては、レイコフとジョンソンは強く反対する。なぜならメタファーは、ある概念の特定の部分の特徴だけを取り上げて強調するが、それによって他の部分の特徴が覆い隠されてしまうからである。「われわれの概念体系が、単一の概念に対してなぜ一貫性のない複数のメタファーを持っているのか、当然の理由がある。それはひとつのメタファーで、単一の概念を言い表せることなどないからである。それぞれのメタファーは、概念のある一面を確実に把握させるが、その他の面は隠してしまう。一貫性のある一連のメタファーによってのみ活動することは、現実の多くの側面を隠してしまうのである。われわれが実生活の中でうまく活動していくためには、メタファーを絶えず変えてみる必要があるように思われる。もしわれわれが、われわれの日常の存在を仔細に把握したいのであれば、相互の一貫性のない多くのメタファーを使用する必要があるように思われる」<sup>30)</sup>。

例えば理論を建築物と見なすメタファーは、科学的な理論を形成していくためには有効なメタファーであるが、理論形成の結果や影響までも表現しているものではない。これに対しては、例えば「古典的理論というものは、その子どもたちが絶えず喧嘩をしている子だくさんの父親である (Classical theories are patriarchs who father many children, most of whom feight incessantly.)」と言うメタファーは、理論史について多少なりとも知識のある者の間では、その内容は理論の歴史的影響と弊害について想像させるものであることが分かる。このようなメタファーは、日常的習慣的に用いられる「字義的」なものではなく、あるコンテキストにおいて通用する「修飾的 (figurative)」ないしは「想像的な (imaginative)」表現、つまり詩的表現であると言える<sup>31)</sup>。

このようにメタファーは、同一の概念について、多様な意味理解を可能にするものである。この意味理解が広く共通性と習慣性を持つ方向に進めば、それは字義的表現となり、論理的思考や体系的な理論形成を可能にする。ジョンソンはこのような思考を、「正当化のコンテキスト」と呼んだ<sup>32)</sup>。しかしこのような思考は、現実の一面しか見ていない。その他の多様な側面を理解するためには、習慣的に用いられなかったり、一貫性がなくても、メタファーを変えてみる必要がある。このような思考は、「発見のコンテキスト」と呼ばれ、詩的表現の必要性もここに出てくると言える。われわれの日常生活は、メタファー的思考に基づいており、それは字義的表現と詩的表現、正当化のコンテキストと発見のコンテキストとの両極の間で展開されていると言えるだろう。この両極間の運動の中で、われわれの現実世界や自己自身の生についての理解が、豊かに展開していくのである。「理解は命題的把握に加えて、むしろ展開していく過程または活動である。この活動の中で、イメージ図式が(組織的構造として)われわれの経験を部分的に秩序づけ、形成するのであり、具体的経験によって図式が身体化 (embodiment) され、修正されるのである」<sup>33)</sup>。

それでは、このような理解を動機づけ、正当化と発見のコンテキストを結びつけているものは何だろうか。それはわれわれが、自己の生や世界を有意味で一貫したものとして理解しようとする態度であり、レイコフとジョンソンが言うように、「人生は物語である (Life is a story. )」というメタファーで最も適切に表現されるものであろう<sup>34)</sup>。このメタファーは、われわれが人生の中で経験する諸々の出来事や行為を、一貫性のある全体 (物語) として常に関連づけ、理解し

ようとしている態度を示唆するものである。人間のこのような態度をブルーナーは「物語的思考 (narrativ mode)」と呼び<sup>35)</sup>、またそれによって獲得される自己を、リクールは「物語的自己同一性 (identité narrative)」と呼んだのであった<sup>36)</sup>。

## おわりに

これまでの考察において、ミッシュの解釈学的論理学と、レイコフとジョンソンの認知意味論との間に、われわれは多くの共通点を見いだすことができる。すなわち客観主義の否定、表現と理解の根底に身体を置くこと、言語的想念による典型的なものの理解とメタファーによる定義、論証性の両極化と正当化と発見のコンテクストなどである。

これらの共通点を踏まえた上で、われわれはミッシュにおいては触れられることのなかった問題——喚起的言葉と純粹に論証的形式の発生的関係——について、考えてみよう。認識の対象は、主体から始めから独立に存在しているわけではなく、身体が自然的あるいは文化的社会的環境と相互行為する中で、言語的表現によって対象化されてくる。この表現は、原初的な段階では身体的感覚を伴っており、この表現が対象との動的な関係に基づいて分節化していくのである。この分節化の過程は、ある一定の共通理解に基づいて行われるが、この共通理解は、環境との身体的相互行為の中で形態化されてきた一定の図式 (イメージ図式) に基づいている。認識論の伝統では、これらはカテゴリーと呼ばれてきた。しかしここで言うカテゴリーは、カントの言うような確定的なものではなく、われわれの経験が繰り返される中で、判明してくるものなのである。それはデイルタイが呼んだ「生のカテゴリー (Lebenskategorie)」<sup>37)</sup>と同じ特徴を持つものであると言えよう。レイコフとジョンソンは、このカテゴリーが、身体に基盤を持ち、経験を組織化して意味づけ、さらに別の経験に適用されることで、経験の理解を容易にし、対象についての新しい表現と理解を可能にすることを、豊富な実例を挙げて示している。そしてこのような表現と理解は、一般にメタファー的な特徴を持つのである。

われわれの認識においては、このようなメタファー的思考 (イメージ図式の適用) が大きく関与している。ミッシュの言う論証性の両極化も、このメタファー的思考に基づいている。われわれが日常生活に安定を求め、コミュニケーションを円滑にしていくためには、メタファー的思考は広く習慣化し、対象に対して字義的な意味を確定していく方向へと進む。それに対して、自己の経験に何らかの固有の意味や価値を求めようとする場合、メタファー的思考は、意味連関の一貫性を破壊するような方向へと進むのである。この両極的な関心——いわば科学的関心と詩的関心——は、われわれ人間にとってどちらも自然的な関心であり、これらの関心に基づいて、一方では精神科学、さらには自然科学の理論体系が形成され、他方では文学や詩が形成されてきたと言える。そしてこれらの関心を結びつけるものは、「人生は物語である」というメタファーで典型的に現されるように、われわれが自分の人生全体を常に有意味な連関として理解しようとする態度であると言ってよいだろう。

レイコフとジョンソンは、彼らの研究において、実生活における人間の理解に、メタファーがどのように使用されているのかを具体的に記述分析し、それらの基となる基本的メタファーを導出し、関連づけを行っている。さらにこの基本的メタファーの根底に、どのようなイメージ図式が働いているのかを分析し、われわれの認識において、複雑なメタファーが発生してくる過程と

構造を明らかにしようとしている。また、最近では、身体と概念形成、身体と理性との関係を問  
い直し、これまでの西洋哲学史の再解釈を試みようとしている点でも、注目されるべきだろう<sup>38)</sup>。  
もちろん、彼らが記述分析する基本的メタファーやイメージ図式が、どの程度妥当性を持っている  
のかは、今後の具体的で詳細な検討が必要であろう。しかし、彼らが提示した一連の基本的メ  
タファーとイメージ図式は、われわれの日常生活での談話に共通理解を促すものとして、人間が  
自己の生の物語を説得的・論証的に語ることを可能にする一方で、字義的で習慣的理解に留まっ  
ている生の物語に対しては、新たな表現と理解の可能性を与えるものでもある。学校における教  
授—学習活動や、家庭生活での談話の中で、基本的メタファーとイメージ図式がどのように使用  
されているのかを記述分析し、それを学習場面や家庭生活での新たな経験に適用していくこと  
は、子ども自身が自己の生を物語として豊かに語ることを可能にしていくものだろう。

しかしわれわれは、認知意味論と解釈学的論理学との違いもまた、自覚しておかなければなら  
ない。ミッシュの解釈学的論理学で問題となるのは、経験と認識、生と概念あるいは生と論理と  
の間の亀裂をいかに克服するかということであり、この克服は喚起的言葉によって可能になる。  
すなわち喚起的言葉によって、実存的意味と論理の意味とが「解釈学的に媒介」されるのである。  
このことからミッシュは、喚起的言葉に実存的契機を見だし、広い意味での論証性に、生の実  
存的側面を含めていることが分かる。このことは、リップスの解釈学的論理学では、さらに先鋭  
化された形で論じられている<sup>39)</sup>。

しかし認知意味論で問題となるのは、われわれの認識に作用する基本的メタファーと、その根  
底にあるイメージ図式の記述分析である。そこでは人間の生の実存的側面は、考察の対象外にな  
っているように思われる。このことはレイコフとターナーが行った、文学作品におけるメタファー  
の記述分析を見ても明らかだろう。そこではメタファーの研究は、「経験的学問」なのであり、  
その妥当性については、いつでも反証の可能性が考慮されているとされる<sup>40)</sup>。

子どもの生の物語的表現において、その豊かな展開と創造のためには、メタファーの実存的契  
機が必要不可欠である。そしてこの実存的契機は、あらかじめ定まった基本的メタファーとイメ  
ージ図式を組み合わせるだけで、意図的に作り出されるものではない。むしろ対象を表現するた  
めの的確な語を模索していく中で、作者の想像力と読者の読解力により偶然的に初めて獲得され  
るものである。つまり、喚起的言葉の効果は予測不可能であり、その解釈者に委ねられていると  
言ってよい。この意味で、認知意味論は物語の展開のために、基本的メタファーとイメージ図式  
という形で多様なトポス（論点）を与えることはできるが、その効果は最終的に聞き手の解釈に  
委ねられているのである。

## 註

- 1) Wilhelm Dilthey, Über die Möglichkeit einer allgemeingültigen pädagogischen Wissenschaft, in: ders., Gesammelte Schriften, Bd. IX, S. 56-82.
- 2) 拙論、「デイルタイの教育学とナラトロジー」、別府大学『別府大学紀要』、第47号、2006年、49-60頁。
- 3) 例えば、以下の文献を参照。Jerome Bruner, Acts of Meaning, Cambridge/Massachusetts/London/England 2002. George Lakoff, Women, Fire, and Dangerous Things, Chicago/London 1987.

Lakoff and Turner, *More than Cool Reason*, Chicago/London 1989. Mark Johnson, *The Body in the Mind*, Chicago/London 1990. Lakoff and Johnson, *Metaphers We Live By*, Chicago/London 2003. Lakoff and Johnson, *Philosophy in the Flesh*, New York 1999. Andreas Dörpinghaus/Karl Helmer(Hg.), *Rhetorik-Argumentation-Geltung*, Würzburg 2002. Petra Drewer, *Die kognitive Metapher als Werkzeug des Denkens*, Tübingen 2003. Rebecca Netzel, *Metapher: Kognitive Krücke oder heuristische Brücke?*, Teil 1/2, Hamburg 2003. 尼ヶ崎 彬『ことばと身体』、剋草書房、1998年。菅野盾樹『新修辞学』、世織書房、2003年。また、教育学とレトリックとの関係については、以下の文献を参照。Richard Edwards et al., *Rhetoric and Educatinal Discourse*, London/New York 2004. Lutz Koch(Hg.), *Pädagogik und Rhetorik*, Würzburg 2004.

- 4) 解釈学的論理学については、次の文献を参照。Otto Friedrich Bollnow, *Studien zur Hermeneutik*, Bd. II, Freiburg/München 1983. Frithjof Rodi, *Hermeneutische Logik im Umfeld der Phänomenologie: Georg Misch, Hans Lipps, Gustav Špet*, in: ders., *Erkenntnis des Erkannten*, Frankfurt a. M. 1990, S.147-168.
- 5) Georg Misch, *Der Aufbau der Logik auf dem Boden der Philosophie des Lebens*, München 1994, S.78.
- 6) Hans-Ulrich Lessing, *Lebensverhalten, Ausdruck und Leiblichkeit*, in: *Dilthey-Jahrbuch*, Bd. 12/1998-2000, S.61-89.
- 7) このような身体観については、ボルノウ、大塚 恵他訳『人間と空間』、せりか書房、1994年、270-275頁参照。
- 8) Misch, a.a.O., S.148.
- 9) Misch, a.a.O., S.149.
- 10) Dilthey, G.S., Bd.VII, S.80f.
- 11) Misch, a.a.O., S.351.374.
- 12) Misch, a.a.O., S.367.
- 13) Misch, a.a.O., S.367.
- 14) Misch, a.a.O., S.393f.
- 15) Misch, a.a.O., S.395.
- 16) Misch, a.a.O., S.395.
- 17) 新村 出編『広辞苑』第四版、岩波書店、1995年による。
- 18) 豊永 武盛『言葉と病い』、日本評論社、2003年。
- 19) Misch, a.a.O., S.573.
- 20) Misch, a.a.O., S.556.
- 21) Misch, a.a.O., S.574.
- 22) Misch, a.a.O., S.570.
- 23) Lakoff and Johnson, *Metaphors We Live By*, p.230.
- 24) 新村 出編『広辞苑』第四版。
- 25) Lakoff and Johnson, *ibid.*, p.46. Johnson, *The Body in the Mind*, p.105.

- 26) Johnson, *ibid.*, p.29.
- 27) Johnson, *ibid.*, p.255.
- 28) Johnson, *ibid.*, p.30.
- 29) Lakoff and Johnson, *ibid.*, p.118.
- 30) Lakoff and Johnson, *ibid.*, p.221.
- 31) Lakoff and Johnson, *ibid.*, p.53. 同一概念で一貫性のないメタファーの例として、例えばジョンソンは人間を「機械」と「有機体」に見なすメタファーを挙げて、医学や生物学にそれぞれのメタファーが与えた影響について論じている (Johnson, *ibid.*, pp.127.)。このような例は教育では、例えばボルノウが名づけたように、教育を「機械的 (手細工的)」行為と「有機的」に育てる行為に例える対照的メタファーなどが挙げられるだろう (ボルノウ、峰島旭雄訳『実存哲学と教育学』、理想社、1985年、20-23頁)。
- 32) Johnson, *ibid.*, p. x x iv.
- 33) Johnson, *ibid.*, p.30.
- 34) Lakoff and Johnson, *ibid.*, p.172.
- 35) Bruner, *Acts of Meaning*, p.94.
- 36) リクール、久米 博訳『時間と物語 III』、新曜社、1988年、452頁。
- 37) Dilthey, G.S., Bd.VII, S.228-245.
- 38) Lakoff and Johnson, *Philosophy in the Flesh*, 1999.
- 39) Hans Lipps, *Untersuchungen zu einer hermeneutischen Logik*, Frankfurt a.M. 1976.
- 40) Lakoff and Turner, *More than Cool Reason*, p. 136.



## **Leib und Metapher**

— hermeneutische Logik und kognitive Semantik —

Masaya SETOGUCHI